

国王のイメージ戦略(2)

—ルイ14世と三つのヴェルサイユの祝祭—

Strategy of King's image (2)
—Louis XIV and three Versailles Festivals—榎本 恵子¹¹大妻女子大学文学部Keiko Enomoto¹¹Faculty of Language and Literature, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：17世紀，フランス，国王のイメージ製作，ルイ14世，ヴェルサイユの祝祭

Key words：17th century, France, Fashioning King's image, Louis XIV, Versailles Festivals

抄録

今日、アメリカのトランプ大統領、フランスのマクロン大統領のイメージ戦略が話題になっているがこれらの戦略は今に始まったことではない。改めて考えてみるとそこには「芸術の政治化」があるように思われる。本研究の目的は、そのイメージ戦略の原点の一つともいえるルイ14世のイメージ政策のうち彼が主催した祝祭に焦点を当て、国内外へのパフォーマンスを検証し、その位置づけを明らかにすることであり、本稿はその祝祭の持つ意味をまとめたものである。

序論

フランス国王は、一国の主として国内外にその存在を顕示するためにイメージ戦略を行ってきた。多くの場合、勝利の覇者のイメージとして古代ローマが選ばれ、歴代の国王は古代ローマ風の鎧かぶとに身を包んだ姿あるいはギリシャ神話の神々や歴史上の英雄の姿に表象され肖像画、彫刻やメダルにその雄姿を残した。

ルイ14世(1638-1715)はクローヴィス、シャルルマーニュ、キリストになぞらえられた絵画が残されているが、よく知られているものとして、太陽王アポロン、ヘラクレスがある。特徴的なのは彼のイメージ製作は、何かに「表象する」から自らが「表象となる」ことへと変化していくことである。表象するとは、モデルの姿とそのイメージするところすべてを借りることで、実物よりも偉大に見せる効果がある。そしてそれが雄弁な政治的パフォーマンスとなる。自らが「表象となる」とは、自らが神話になるということで、自らがそれまで表象してきた対象の頂点に立つことを意味している。

ルイ14世はヴェルサイユ宮殿で祝祭を開催しているが、それは彼が「表象する」から「表象となる」時期と重なっている。本研究は、ルイ14世のイメージ戦略におけるヴェルサイユでの祝祭の意味を明らかにし、その位置づけを浮き彫りにすることにあつた。

本論では、三回行われたヴェルサイユの祝祭の性質の違いを明らかにすることで、ルイ14世のイメージ戦略変遷との関連性をまとめ、報告としたい。

1. ルイ14世とヴェルサイユの祝祭

祝祭は「平和と戦争の間のつかの間の休息となり、国王の気晴らしであり、また、宮廷や愛する女性へささげる楽しみ[1]」である。ルイ14世は、親政を始めた1660年からヴェルサイユへ宮廷を移転する1682年までヴェルサイユ宮殿で祝祭を三度開催し、国内外に「これまで見たことのないほどの偉大な輝き[2]」を示した。

2. 1664 年の祝祭

最初の祝祭「魔法の島の歓楽」*Les Plaisirs de l'île enchantée* は 1664 年 5 月 7 日から 14 日までの 1 週間開催されたが、表向きは王太后アンヌ・ドートリッシュと王妃マリー・テレーズに、実際は時の愛妾ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール嬢に捧げられたものであった。余興の演出はモリエールに委ねられ、アリオストの『狂えるオルランド』の魔女アルシードに捕らわれたロジェのエピソードを軸とした世界観の中に理想の宮廷を具現化し、観客を夢の世界にいざなった。

2 日目『エリード姫』*La Princesse Elide*, 5 日目『はた迷惑な人々』*Les Fâcheux*, 6 日目『タルチュフ』*Le Tartuffe*, 7 日目『ゴリ押し結婚』*Le Mariage forcé* とすべてモリエールの作品が上演されたが、それらの主題は、理想の貴族社会、現実の貴族社会、教会、ブルジョワ階級の映し出したもので、若き国王が摂政であった母後の圧力を払拭したいという思いに溢れていた。

3. 1668 年の祝祭

すでに母后アンヌ・ドートリッシュは亡く、時の愛妾モンテスパン公爵夫人を始め、王妃、ラ・ヴァリエール嬢、フランソワーズ・スカロン（のちのマントノン侯爵夫人）が彩った「国王の大いなる喜び」*Le Grand Divertissement royal* は 5 月にフランドル戦争終結のためにスペインとの間に締結されたエクス・ラ・シャペルの講和条約を祝うものであった。前回の祝祭のとき、招待客の宿泊施設が整っていなかったことの反省から 7 月 18 日一晩限りの祝祭とした。庭園内の軽食、食事、花火、劇場、舞踏会場、照明はこの年のヴェルサイユの出費の三分の一に相当する額であった。招待客の心に鮮明に記憶された噴水と花火の演出は自然、元素、季節、そして宇宙をも掌握した世界の頂点に立つ国王ルイ 14 世を象徴した。

驚嘆 *merveilleux* と共に語られるヴェルサイユの祝祭の豪華さは、国王の経済力と支配力に裏打ちされた権威を表現したのである。

4. 1674 年の祝祭

1674 年 7 月 4 日から 8 月 31 日までの間に 6 日間開催された「ヴェルサイユの愉しみ」*Les Divertissements de Versailles* はフランシュ・コンテの征服を祝したものであった。

この祝祭ではリュリとキノーの作品を中心とした演目に、モリエールやラシーヌの作品が再演された[3]。今まで演出していたモリエールがすでに亡く、彼を上回る人材がなかったからである。7 月 4 日、キノーとリュリの『アルセスト』*Alceste ou le Triomphe d'Alcide*, 7 月 11 日には同じくキノーとリュリの『ヴェルサイユの洞窟』*La Grotte de Versailles*, 7 月 29 日にはモリエールの『病は気から』*Le Malade imaginaire*, 7 月 28 日にはリュリの『アモールとバッカスの祭典』*Les Fêtes de l'Amour et de Bacchus*, 8 月 18 日にはラシーヌの『イフィジェニー』*Iphigénie* が上演された。前回までの一番大きな違いは、祝祭全体を彩る幻想による驚異の演出が半減し、真実らしさ *vraisemblance*, 礼節 *bienséance* に縁どられた、より古典主義演劇世界観となり、これまでの庭園内における散歩、観劇が室内になったことである。もはや招待客が祝祭のいち登場人物になったかのような錯覚を起こさせた演出ではなくなり、スペクタクルと観客の間に一線がひかれたのである。招待客は座って室内に設えられた演目を楽しむ。踊る王ルイ 14 世が絶対君主制確立とともに踊らなくなり、外から統治するようになったことを暗示していると捉えることができる[4]。

結論

祝祭の性質の大きな変化はこのように第二回目と第三回目に起きた。この間に起きた歴史的事件は何かというと、長年続いたフランドル戦争の終結と新たなオランダ戦争開始である。1668 年の祝祭の 2 年後フランドル戦争が終結する。そしてその年、ルイ 14 世はモリエールの『豪勢な恋人たち』*Les Amants magnifiques* を最後に自らが踊ることをやめる。同年ルイ 14 世の依頼で作られたコメディ・バレエ『町人貴族』*Le Bourgeois gentilhomme* が観客としての国王へ捧げられた作品であることを考えると、ここに大きな節目を見ることができる[5]。

そして第三回目の祝祭の 5 年後の 1679 年、ヴェルサイユ宮殿の鏡の間の天井画はルイ 14 世の偉業を描いたル・ブランの絵で飾られた。第一案ではアポロンを主題にする予定のものが、第二案ではヘラクレス、そして第三の最終案ではルイ 14 世自身の武勇伝となったもので、国王自らが「表象となる」ことを決定づけるものであった。

国王がその表象を太陽神アポロンから、半神ヘラクレス、そして自らが神話となっていくその間、実はルイ 14 世はもう一人古代の英雄を表象に取っている。アレクサンドル大王である。1665 年、マケドニアの若き覇者を描いたラシーヌの『アレクサンドル大王』*Alexandre le Grand* が上演され、ル・ブランは「アレクサンドルのバビロン入城あるいはアレクサンドルの勝利」を描いている。

ヘラクレスとアキレスを先祖に持つといわれているが、実在の地上の覇者を表象としたことは後のルイ 14 世のイメージにどのような影響を与えたのだろうか。今後の課題は、このアレクサンドル大王に表象されたルイ 14 世を国王の偉業と相關的に分析、考察を進めていきたいと考えている。なぜならこの研究がルイ 14 世のイメージ戦略の全貌を明らかにすることになるからである。

謝辞

現地調査を滞りなく進められるよう協力してくれたパリ・ソルボンヌ大学ジョルジュ・フォレストイエ氏、マザリーヌ図書館館長、ヴェルサイユ宮殿及びヴェルサイユ宮殿資料室関係者各位に深謝の意を表明する。

付記

本研究は平成 30 年度大妻女子大学戦略的個人研究費（S2919）の助成を受けたものである。

引用文献

[1] マリー＝クロード・カノヴァ＝グリーン「王の思惑、劇作家モリエールの戦略」、前掲書、8 巻、p. 387。榎本恵子、「モリエールのドラマツルギー

～Défi 挑戦～『タルチュフ』と『ドン・ジュアン』、『コミュニケーション文化論集』第 16 号、2018 年、p. 60。

[2] 6 回目の祝祭でスペクタクルの上演はなかった。

[3] Robert Ballard, « Sujet de la Comédie qui se doit faire à la grande Fête de Versailles », *Le Grand Divertissement royal de Versailles*, Paris, 1668, Molière, *Œuvres complètes*, t. I, édition de Georges Forestier, Gallimard, coll. Pléiade, p. 1016。バラール「ヴェルサイユにおける王の盛大なる祝祭にて上演予定の喜劇の題材」『ヴェルサイユにおける王の盛大なる祝宴』（祝祭の時に配布されたバラールによるパンフレット）、『モリエール全集』、秋山伸子訳、臨川書店、2001 年、7 巻、p. 6。

[4] 文化的にみると、絶対君主制確立は、踊りが得意なルイ 14 世は自らが踊ることで踊りを宮廷のステータスにし、祝宴内でのヒエラルキーを用いて確立したといえることができる。さらに国王が体力的限界から祝祭で踊ることをやめたというが、それは絶対君主制がすでに確立しており、国王が踊る必要がなくなったことを意味する。ルイ 14 世の踊りと絶対君主制確立の関係性はアポストリデスの『機械としての王』みすず書房、1996 年、『犠牲に供された君主』テオリア叢書、平凡社、1997 年他、榎本恵子、前掲論文参照。

[5] 榎本恵子、「モリエールのドラマツルギー～Défi 挑戦～『町人貴族』あるいはコメディ・バレエという幻想」、『コミュニケーション文化論集』第 18 号、2020 年、p. 1-19。

（受付日：2020 年 3 月 29 日、受理日：2020 年 4 月 13 日）

榎本 恵子（えのもと けいこ）

現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科専任講師

パリ第 4（パリ＝ソルボンヌ）大学フランス文学・比較文学科博士過程修了（博士、文学）

専門はフランス 17 世紀演劇。現在フランス 17 世紀喜劇、ヴェルサイユの祝祭、ルイ 14 世のイメージ製作に関する研究を行っている。

主な著書：『毎日 1 文 筆記体でフランス語』（単著、白水社）、『混沌と秩序－フランス十七世紀演劇の諸相』（共著、中央大学人文科学研究所研究叢書 60 号）、『フランス 17 世紀演劇事典』（分担執筆、中央公論新社）